

初任期から中堅期にかけての日本語教師の授業スタイルの形成

— 2 名の中国人日本語教師の 14 年間の足跡を追って —

康 鳳麗¹⁾, 森脇 健夫²⁾, 坂本 勝信³⁾
小西 知代⁴⁾, 田 泉⁵⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部

2) 三重大学大学院 教育学研究科

3) 常葉大学 経営学部

4) 国際教養大学 日本語プログラム

5) 天津外国語大学 日本語学院

事例研究

初任期から中堅期にかけての日本語教師の授業スタイルの形成

— 2 名の中国人日本語教師の 14 年間の足跡を追って —

康 鳳麗¹⁾, 森脇 健夫²⁾, 坂本 勝信³⁾
小西 知代⁴⁾, 田 泉⁵⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部

2) 三重大学大学院 教育学研究科

3) 常葉大学 経営学部

4) 国際教養大学 日本語プログラム

5) 天津外国語大学 日本語学院

キーワード： 授業スタイル, 日本語教師の力量形成, 中国人日本語教師, ライフヒストリー

要 旨

本稿では、事例研究として、14 年間（2006～2019 年）二人の中国人日本語教師の初任期から中堅期にかけての授業スタイルの形成過程を追った。その結果、明らかになったことは次の 3 点である。

1. テキストの内容を正確に、丁寧に教える初任期から、自分なりの授業スタイルを形成する中堅期へと移行している。
2. 授業スタイルの形成の契機となっているのは、日本への留学体験（現場を一旦離れ、知見を広める体験）と中国帰国後のサークル活動である。
3. テキスト内容の正確な習得と学習者の自主的な日本語活動の折り合いをどのようにつけるか、この折り合いのつけ方に、教師の学習者観が大きく影響する。これまでの一連の研究から言えることは、教師のライフヒストリーにおいて、授業スタイルの形成は、初任期から中堅期にかけての主要な課題である。この時期に形成された授業スタイルは、多少の補完や修正が加えられながら、熟練期に完成することになる。

1. 経緯と目的

1-1. 経 緯

これまで私たちは、ライフストーリー的アプローチによる日本語教師の熟達化の過程を明らかにするため、十数年にわたって事例研究を積み重ねており、いくつかの熟達化モデルを明らかにしてきた¹⁻⁶⁾。

その中で最も基本的なモデルは「授業スタイルと観の形成」モデルである。このモデルは、事例研究の中で考案され、その後の事例研究によってより確固たるものになってきている。

授業スタイルとは、その教師が授業を構想し、教材づくりや授業を行う際に見られる特徴のある「一貫性」と定義する⁷⁾。また、教師の内的世界を統一する核となるのが「観」である。授業「観」、子ども「観」、さらには知識「観」や人生「観」など、こうした「観」の集合体が「観」である。「観」は教師本人の被教育体験、実践的経験、教職への希望や夢によっても形作られていく。授業スタイルとは、「観」が具体的な技術や方法によって肉付けされ、具体的な姿となって表れたものと考えることができる。

事例研究を重ねる中で得た一つの仮説は、「観」の形成、授業スタイルの変革の過程は、できごととの出会い、あこがれ、そして、こだわりによって促進されること、ま

た、「観」と授業スタイルの形成が同時に進行することである⁸⁾ (図1)。

授業スタイルがはっきりと形成されていない時期とは「観」も明確になっていない時期である。「観」は教師として、実践的な経験の中で「できごと」と出会い、「あこがれ」を抱き、「こだわり」を持つことで形成される。「観」は技術・方法を選び、構造化していく。この逆の場合もある。つまり、ある方法・技術にこだわることで「観」が形成されるという場合である。いずれにせよ、授業スタイルと「観」の形成は相即的な発達の関係にある。

1-2. 目的

これまでの事例研究で明らかになったことは以下の通りである。

- ① 教師の授業スタイルの構築は、教えることの基礎・基本の獲得の上に「学習者観」の転換によって促される。
- ② 「学習者観」の転換は、教師自身の課題意識の上に「できごと」との出会い（例、ポジションの変化、留学経験等）によって起こる。

授業スタイルの獲得において、初任期から中堅期にかけての時期は重要である。初任期（1～5年）では、授業の基礎基本の会得、すなわち教育内容（教える内容）について、正確な知識と教える技術を獲得する必要がある

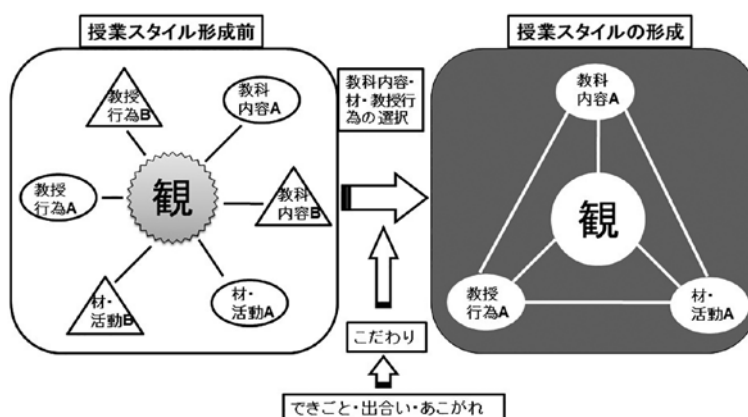


図1 授業スタイルと観の形成は同時進行

る。その上で、自分なりの授業スタイルを構築するのが、この時期である。熟練期（20 年以上）においては、新たな授業スタイルの構築は難しい。

本研究の目的は、ほぼ同時期に日本語教師となった二人の中国人日本語教師の、14 年間にわたる足跡を追い、初任期から中堅期にかけての授業スタイルの確立の過程を事例研究として明らかにすることである。そして、両者の比較対照により、どのような要因が授業スタイルの違いに影響しているのか、解明することである。なお、この二人については、初任期の際に事例として取り上げたことがある⁹⁾。その当時、両者とも授業方法についての多少の工夫はあったが、教科書内容を正確に学生に習得させる授業を行っていた。その後、実践経験を積み、また、さまざまな「できごと」との出会いの中で、二人はどのような授業スタイルを身に付けていったのだろうか。これが本研究のリサーチクエスションである。

2. 方 法

2-1. 研究協力者

同世代の二人の中国人日本語教師（研究協力者）の事例研究を行う。二人は 2005 年から中国のある語学大学において日本語教師として勤務をしている。A さん、B さんとしておく。私たちは両人の授業を初任期から一年に一度程度、参観し、インタビューを行ってきた。

A さん、B さんのプロフィールを紹介する。

A さん

A さんの日本語教師歴は 15 年目である。中国国内の大学で日本語専攻卒業後、日本に留学して日本語言語文学修士の学位を取得した。修士修了後、T 大学日本語学科の専任教師になった。在職中の 2011 年～2014 年に、再び日本に留学して、日本語言語文学博士号を取得した。現職復帰後、大学の管理職にキャリアアップしている。

B さん

B さんの日本語教師歴も 15 年目である。中国国内の大学で日本語専攻卒業後、大学院に進学して日本語言語文学修士の学位を取得した。修士修了後、T 大学日本

語学科の専任教師になった。来日経験のない初任期だったが、在職中の 2008 年～2013 年に、日本に留学し、日本語言語文学博士号を取得した。その後現職に復帰し、今日に至っている。

2-2. 研究の方法

私たちは、14 年間にわたって研究協力者（授業者）の授業を観察し、記録をとると同時に、授業者へのインタビューを行ってきた。授業観察は複数の観察者（研究者）が行い、授業の特徴を指摘しながら、その特徴の由来をライフヒストリーインタビューによって明らかにするという方法をとった。インタビューでは、授業の特徴を支える授業者の「観」を明らかにし、その「観」の形成について、契機となる「できごと」を語ってもらった。

3. 結 果

3-1. A さんの授業スタイルの構築

A さんの授業スタイルの変化は漸次的である。その中で比較的大きな変化は留学後のアクティブラーニングの採用である。授業中の教師と学生との関わり方、学生間の活動は、表 1 の通りである。●は授業の進め方で、学生の活動を取り入れている部分である。（表 1 A さんの授業の変容を参照）

2016 年の授業では、動詞の可能形の作り方、使い方を説明した後、数名の学生に、動詞の可能形を使って問いかけ、答えを全員でシェアした。そして、一方、見学者へのインタビュー活動を行った。グループ内でのインタビュー項目作成、インタビュー、そして最後にクラス全体でその結果をシェアした。学生たちは、楽しそうに活動し、分からない言葉は真剣にメモしていた。

2019 年の授業では、本文記載の複合動詞の意味を、1 つのグループに 3 つ、寸劇で表現するようにグループ活動をさせた。まず、グループ内で準備する、その後、寸劇を演じる、そして、寸劇を見て、観衆の学生が動詞の意味を当てる、という活動だった。寸劇では、「しかりつ

表1 Aさんの授業の変容

年/月	内容と時間	学習者	授業の概要
2006/9	文法読解 (能力試験対策) 100分	大学 日本語専攻 3年生	○〔10分〕教師による雑談の時間 ○〔90分〕教科書内容 プリントに沿って文法を解説し、練習問題の答え合せ、日中対訳をさせる。 ●【進め方】 教師が逐一解説を行う。学生に対訳させて、教師が補足説明する。間に、学生の疲れを考慮し、3分間休憩を入れた。
2007/11	基礎日語 (基礎日本語) 100分	大学 日本語専攻 1年生	○〔5分〕学生による自由課題発表と教師コメント ○〔95分〕教科書内容 当該課の、宿題チェック、会話練習、読解文、練習問題の答え合わせを、順番に進めていく。 ●【進め方】 単語、読解文、練習問題は、教師が解説する、学生が座席順で音読、対訳する。
2016/3	基礎日語 (基礎日本語) 50分	大学 日本語専攻 1年生	○〔5分〕学生による自由課題発表と教師コメント ○〔30分〕教科書内容 当該課の、単語と本文を、教科書に沿って進めていく。 ●【進め方】 学生に音読、対訳させるのは留学前と変わらないが、必要に応じて、学生に本文の形をまねて、自分の経験を言わせたり、学生と会話したりしており、学生との関わり方に変化があった。 学習項目を使ったグループ活動があった。 ●〔15分〕グループ活動 ・グループで見学者へのインタビュー項目を作成する。 ・見学者へインタビューする。 ・インタビュー内容をクラスで発表して、共有する。
2019/12	高級日語 (上級日本語) 100分	大学 日本語専攻 3年生	○〔50分〕2つのグループによる自由課題発表と教師のコメント。 30分の予定が大幅時間オーバー。学生を注意する。 ○〔35分〕教科書内容 ルーティン化された能力試験対策のための文法練習をした後、当該課の言葉理解、文学作品の場面理解を、教科書に沿って進める。 ●【進め方】 教師が教科書に沿って進めていくこと、学生に音読、対訳させることは留学前と変わらないが、必要に応じて、学生に寸劇を演じさせた。 ●〔15分〕グループ活動 ・本文記載の複合動詞の意味を、1つのグループに3つ、寸劇で演じるように準備する。 ・寸劇をする。 ・観衆の学生が動詞の意味を当てる。

ける、拾い上げる、飛び越える、狙い撃つ、差し伸べる、追い払う、打ち負かす、さしはさむ、泣きすがる」等が演じられた。学生たちは、当たった時に歓声をあげ、当たらないときは演技者がもう一度わかりやすいように演技する、という対話的な活動だった。

A さんによれば、この活動は当初予定していなかったとのことである。授業で学生の様子やノートを見て正確に理解できていないと感じたので、とっさに入れることにしたと言う。「やっぱり活動的にやったほうが理解しやすい。特に、動詞の場合、動作があって、それから（寸劇を演じると）、面白いものがいっぱい出てくるから、たぶん印象に残ると思う。」と語った。

「日本語を教えていて、一番変わったのは、私の説明がだんだん少なくなって、学生に説明してもらうことが多くなったこと」だと述べる。だが A さんは次のようにも述べる。「コントロールしないと不安というところもある。でも、説明しても、質問しても、反応がなくて、「すごく授業が静か」だったことに問題を感じていた。そこで、「学生が発言できるように」この活動を取り入れるようになってきた。その目的の一つは、日本語の練習になることで、二つ目は、自分の考えを整理して、表現することができるようになることだと言う。その背景には、A さんの現在の学生把握がある。「学生たちが考え方を述べるのが下手で、論理的に何か言うことがなかなかできないので、発言することで、それに気づいてほしい。」と語っていた。

3-2. B さんの授業スタイルの構築

B さんの基礎日本語（2 年生）の授業実践の最も大きな変化は、留学後にアクティブラーニングの「フリートーク」、「自由課題発表」が用いられるようになったことである。

「フリートーク」とは、教科書内容とは別に、あるテーマについて学生に自由に話させる活動である。「新学期はどんなことを計画しているか」「将来、住みたい都市はどこか？その理由は何か？」など、テーマを事前に与え、内容を考えて整理して、みんなの前で、日本語で話せるように準備してくることが求められる。また、「自由課題発

表」とは、学生が自由に課題を決めて発表する活動である。初任期の「会話発表」の進化バージョンである。初任期にも、授業の初めに 4 人～5 人の学生が興味関心のある話題についてグループで会話をするという教室活動があった。2016 年の見学時には、自由課題発表は「個人発表」に変わった。そして、2019 年の見学時には、それがペア発表になっていた。ペアは、定期的に席替えをしているため、固定されていないという。内容は自由だが、既成のテキストからの丸写しは禁止され、自力で考えて、日本語で表現することが求められていた。

授業中の時間配分は、表 2 の通りである。●は「フリートーク」と「自由課題発表」の部分である。（表 2 B さんの授業の変容を参照）

2016 年と 2019 年の授業見学の際、活動の位置づけに B さんの「揺れ」を見ることができた。

2016 年の授業では、「フリートーク」が始まると、一人の学生が教壇に来て進行役を務める。進行役が本日の予定を黒板に書いた後、「今日のフリートークは、特定のテーマについて話すのではなく、3 つゲームを用意した」と説明する。その後の 20 分間、場を仕切った。「フリートーク」の後には別の学生による 15 分の「個人発表」である。2 つの発表が終わって教師が 5 分程度、コメントをした。

それに対して 2019 年の授業では、「フリートーク」のテーマは、教師が与えた「将来住みたい都市とその理由」である。教師は 1 人目の発表者をあてて、その後、今の発表者が次の発表者をあてていく。教師は、話の最中でも文法ミス等を訂正して、話を全員が共有できるようにサポートした。また、ペアでの「自由課題発表」の後、発表内容について、進行役と学生全員が「どんな場面だったか、登場人物の人間関係や名前は何か、どんなことを言ったか？」という問答形式で、内容を確認し、共有する。その後、教師が登場して、「自由課題発表」の原稿を、後方備付のタッチパネルパソコンに映し出し、発音や文法、言葉の使い方などについて逐一訂正をする。「フリートーク」「自由課題発表」「質問」「教師の原稿添削」に 50 分かけた。

B さんは、留学から帰国直後、自力で学習することの

必要性を強調し、「教師の存在感を弱めたい」と述べた。学生進行役がうまく流れを変えることができないときや、進行役がミスに気付かないときにはサポートするが、自らの「存在感」を弱め、見守り役に徹しようとしている。その考え方には、日本留学時に学生の主体的な日本語学習活動を重視した授業実践に触れたこと、また帰国後、日本人の日本語教師が多く参加し、中国人学習者の主体

的な言語活動の方法や内容を研究する「日本人の教師会」に参加したことが大きく影響していると言う。

Bさんは、「教育実践の中で、先生がいくら教えようと、詰め込もうとしても、学生が自ら意欲がないと、本当に学習の効果、また、教育の効果が全く異なってきます。」「教えていて、考え方が変わりました。以前は私が教えていましたが、今は学生が自分で勉強しています。やっぱり

表2 Bさんの授業の変容

年/月	内容と時間	学習者	授業の概要
2006/9	基礎日語 (基礎日本語) 100分	大学 日本語専攻 2年生	○〔5分〕宿題チェック ●〔5分〕5人の会話発表、教師のコメント ○〔90分〕教科書内容 教科書に沿って進める。単語も本文もリピート、対訳させる。席順で当てていく。
2007/11	基礎日語 (基礎日本語) 100分	大学 日本語専攻 2年生	●〔5分〕おしゃべりの時間 教師が1人の学生を当てて、1対1の日常会話をする。 ●〔5分〕グループの会話発表 グループメンバー4人が全員前に来て、会話発表をする。発表後、教師がコメントする。 ○〔90分〕教科書内容 教科書に沿って進める。単語も本文もリピート・対訳させる。席順で当てていく。
2016/3	基礎日語 (基礎日本語) 50分	大学 日本語専攻 2年生	○〔10分〕教科の学期目標、進め方などのオリエンテーションをする。 ●〔20分〕フリートーク 学生1人が進行役で15分間、クラス全員を巻き込んで、言葉遊びを3つする。その後5分弱、教師がコメントする。 ●〔20分〕個人発表 学生1人がパワーポイントを使って心理学分野の報告をする。一方的に話すのではなくて、心理テストも入れて、参加度が高い。その後、教師が5分弱、簡単にコメントする。
2019/12	基礎日語 (基礎日本語) 100分	大学 日本語専攻 2年生	●〔10分〕フリートーク、教師は随所訂正 教師が学生1人をあてて、「将来住みたい都市は？」とその理由を聞く。学生が答えたら、次の人を当てていく。8人発表した。 ●〔40分〕10分弱ペア発表。残り30分を、教師が教室備付けパソコンで原稿を映しながら添削する。 ○〔50分〕教科書内容 教科書に沿って進めて、単語も本文もリピート・対訳させる。

学生自身が授業に参加して、自分で考えることです。先生がいなくても如何に日本語、外国語を勉強していくのか、それが学生に身に付けてほしい能力です。」「学生に達成感を持ってもらいたい。将来、日本語で勉強してもらいたい。日本語を通して、日本文化、経済、他に色々やってもらいたい。人間の在り方が、まず大事です。」と語る。

しかし、2016年から2019年の変化を見ると、学生の様子を見ながら試行錯誤していることがわかる。学生の自律学習を尊重しながら、学生に委ねる部分と教師が教える部分を分けし、教師として積極的に説明をするようになった。また、学生の学習習慣への配慮も忘れない。学生たちに、メモをとりながら話を聞くように指示し、「将来の翻訳、あるいは、通訳の仕事にもつながっていますので、そういう習慣の養成が大事だ。」と言った。

4. 考 察

二人の中国人日本語教師の初任期から中堅期にかけての14年間の足跡を追ってきたが、それぞれ試行錯誤を重ねながら自らの授業スタイルを構築していく過程を明らかにすることができた。二人の中国人日本語教師は、いわゆる中国の日本語教師としては第二世代（戦後日本語教育にあって、中国語母語話者の日本語教師に教えられた世代）にあたる。日本への留学が当たり前となり、教員歴だけではなく、学歴や研究業績を積み重ねなければならない世代である。教育環境が劇的に変化し（ICT環境等の発展）、教える対象の学生も語学専門の大学とはいえ、多様な動機を持ち、必ずしも日本語学習について能動的な学生だけとは言えない。

そのような「教え—学び」の環境の中で、両者とも、在職中の留学体験を契機に、学習者の主体的な学習の重要性に気づき、知識の伝達・習得に重きを置いた「観」から学習者の主体的な学習に重きを置く「観」へと転換している。具体的には日本語学習としてアクティブラーニングを取り入れ、授業改善を図ってきている。

両者の違いもある。授業改善において、一言で言えば、Aさんは漸次的な改革、Bさんは革新的な改革を行って

きている。Aさんの場合、教師の設定した枠組みの中でのアクティブラーニングの設定であり（教育目標の手段としてのアクティブラーニング）、Bさんの活動は、より学生の自由度が高い（ただ、2019年度では少し教師の「出場」（でば）が多くなっている）。

その理由として以下の二点が挙げられる。

一つは、AさんはBさんよりも、学生の現状についてより厳しい見方を持っている、すなわち、「学生が主体的に思考し、表現するといった能力がまだ足りない。したがって、その現状に即した活動を組織する必要がある」と考えていることである。二つ目は、BさんはAさんよりも、主体性が語学学習にとって決定的に重要であると見ており、それは、学生に場を委ねることによって実現する、と考えていることである。つまり、両者の学習者観（学習者をどう観るか）の違いが授業改革に大きな影響を与えていることがわかる。

しかし、両者の授業実践について次のことも指摘しておかなければならない。Aさんは学生の活動をコントロールしながらも、Aさん自身がアクティブラーニングを楽しんでいる。また、Bさんはアクティブラーニングの主体性を生かした活動を大胆に取り入れながらも、日本語能力試験等のためにテキストの内容の理解と定着もおおざりにはできないと感じている。両者ともテキスト内容の正確な習得と学生の自主的な活動をどのように「折り合い」をつけて指導するかを模索している。

今後、授業スタイルをどう完成させていくのか、引き続き見守りたい。

参考文献

- 1) 森脇健夫, 康鳳麗, 坂本勝信, 小西知代. 日本語教師の専門性とその形成—個別事例（小西知代氏）の実践分析及びライフヒストリー研究から—, 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 2009; 29: 11-16.
- 2) 森脇健夫, 康鳳麗, 坂本勝信. 熟練日本語教師の力量内容とその形成—ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究—.

三重大学教育学部研究紀要. 2012 ; 63 : 267-273.

- 3) 森脇健夫, 康鳳麗, 坂本勝信. 教師の「熟練性」の研究—2人の中堅中国人日本語教師の授業の比較分析を通して—. 三重大学教育学部研究紀要. 2017 ; 68 : 355-367.
- 4) 康鳳麗, 森脇健夫, 坂本勝信. 日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成研究—ライフヒストリー的アプローチを用いて—. 鈴鹿医療科学大学研究紀要. 2010 ; 17 : 39-48.
- 5) 康鳳麗, 脇健夫, 坂本勝信. 日本語教師の「熟練性」の研究—熟練教師の目標概念の多層性, ネットワークと機能に注目して—. 鈴鹿医療科学大学紀要. 2015 ; 22 : 31-44.
- 6) 康鳳麗, 森脇健夫, 大西宏明, 坂本勝信, 小西知代, 水野直美, 他. 熟練教師の目標概念の多層化—二つの事例研究を通して—. 鈴鹿医療科学大学紀要. 2018 ; 25 : 83-95.
- 7) 森脇健夫. 教師の力量形成としての授業スタイルとその形成. 学びのための教師論 (グループ・ディクティカ編), 劉草書房, 東京, 167-192, 2007.
- 8) 森脇健夫. 図解! ライフヒストリーアプローチとは何か. 授業づくりネットワーク. 2010 ; 3 : 4-7.
- 9) 康鳳麗, 森脇健夫, 坂本勝信. 中国人日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成—ライフヒストリー的アプローチを用いた事例研究を通して—. 鈴鹿医療科学大学研究紀要. 2008 ; 15 : 19-28.

— プロフィール —

康 鳳麗 鈴鹿医療科学大学保健衛生学部リハビリテーション学科・准教授 修士 (教育学)

〔経歴〕1986年天津外国語大学日本語学部卒業, 2000年三重大学大学院教育学研究科学校教育専攻修了, 2000年鈴鹿医療科学大学東洋医学研究科職員兼講師, 2004年鈴鹿医療科学大学鍼灸学部鍼灸学科講師, 2010年鈴鹿医療科学大学鍼灸学部鍼灸学科准教授, 2012年鈴鹿医療科学大学保健衛生学部理学療法学科准教授, 2019年鈴鹿医療科学大学保健衛生学部リハビリテーション学科

准教授。〔専門〕第二外国語としての中国語教育, 日本語教師の力量形成研究。

森脇 健夫 三重大学大学院教育学研究科・教授 修士 (教育学)

〔経歴〕1980年東京大学法学部卒業, 1984年東京大学大学院教育学研究科博士課程中退, 1984年大阪大学講師, 1991年三重大学教育学部助教授, 2004年三重大学教育学部教授, 2017年三重大学大学院教育学研究科教授。〔専門〕教育学, 教育方法学。

坂本 勝信 常葉大学経営学部・准教授 修士 (日本語教育)

〔経歴〕1993年愛知大学経済学部経済学科中国経済コース卒業, 2000年三重大学留学生センター非常勤講師, 2001年南山大学大学院外国語学研究科日本語教育専攻修了, 2001年南山大学外国人留学生別科非常勤講師, 2004年常葉学園大学外国語学部グローバルコミュニケーション学科日本語教育専攻専任講師, 2009年浜松大学ビジネスデザイン学部サービスと経営学科専任講師及び, 浜松大学留学生別科専任講師 (2011年より准教授), 2013年常葉大学 経営学部経営学科 (浜松) 准教授。〔専門〕日本語教育。

小西 知代 国際教養大学日本語プログラム・講師 英米文学修士, アジア研究日本語教授法修士

〔経歴〕1987年上智大学神学部卒業, 1991年米国アイオワ州ローラス大学英米文学専攻修了, 1993年米国アイオワ州アイオワ大学アジア研究日本語教授法専攻修了, 1997年長野パラリンピック組織委員会通訳・翻訳, 2001年南山大学留学生別科日本語非常勤講師, 2006年国際教養大学日本語プログラム講師 (2016年より専任講師)。〔専門〕外国語としての日本語教育。

田 泉 天津外国語大学日本語学院・准教授 博士 (文学)

〔経歴〕2002年西安外国語大学日本語学部卒業, 2005年西安外国語大学大学院日本語文学専攻修了 (日本語文学修士), 2005年天津外国語大学 日本語学院講師, 2013年大阪大学大学院文学研究科博士課程文化表現論専攻修了 (文学博士), 2016年天津外国語大学 日本語学院准教授。〔専門〕日本語教育。

Development of Language Teaching Style in Early-to-Middle Teaching Careers:

—Fourteen Years of Observations on Two Chinese Teachers of Japanese—

Fengli KANG¹⁾, Takeo MORIWAKI²⁾, Masanobu SAKAMOTO³⁾,
Chiyo KONISHI⁴⁾, Quan TIAN⁵⁾

1) Faculty of Health Science, Suzuka University of Medical Science

2) Faculty of Graduate Education, Mie University

3) Faculty of Business Administration, Tokoha University

4) Japanese Program, Akita International University

5) School of Japanese studies, Tianjin Foreign Studies University

Key words: teaching style, teaching ability development, Chinese teachers of Japanese, life history

Abstract

This study examines the development of teaching style for two Chinese instructors of Japanese. We conducted class observations and life history interviews from 2006 to 2019, covering the early-to-middle stage of their teaching careers. From the class observations and life history interviews over these fourteen years, the following three observations were made.

- 1) Their teaching styles changes as their careers progressed. They closely followed teaching materials in their early stage of their careers but started to form their own teaching styles in the middle stage.
- 2) Experiences that influenced their teaching styles include out-of-class activities in China and: a break from teaching to live in Japan for a time.
- 3) The instructors' views on learners strongly influenced their teaching styles. It is important for teachers to learn how to balance teaching class materials and learners' independent study activities outside of class.

Our long-term research on the instructors' life histories shows that forming a teaching style is the main theme in the early and middle stages of their teaching careers. The teaching style formed during these stages is modified and refined during their teaching careers and established when they become expert language teachers.